



中・低レベル放射性廃棄物の最終処分場アッセ（ニーダーザクセン州）を見学しました。元岩塩採掘場に1967年から1978年に、核廃棄物を入れたキャスクが12万5787個、4万7000m³分が投棄されました。研究用処分場のはずが、なし崩し的に最終処分場に。地元住民は「医療用の放射性廃棄物を実験的に持ち込み、いずれは取り出すという話だったのにだまされた」と憤っています。

岩塩を取り出したあとの空洞は幅60m・奥行40m・高さ15mで、このような穴が131個密集して集まっています。地下750メートルのところに位置する13の穴に核廃棄物は収められており、最初はキャスクを丁寧に積み上げていましたが、だんだん経済性を優先し、建機で15メートル上から投げ入れるようになりました。キャスクが破損しても仕方ないとの見解。当時は原発法ではなく鉱山法で管理されていたため、安全基準が現実にあっていないのも問題でした。

その後長らく放置されていましたが、2008年に1日約1万2000ℓの水が流れ込んでいることが発覚。水が核廃棄物に触れて地下に浸み込むと、周辺環境を汚染する恐れがあり、かつ地層の圧迫で現場自体が崩壊する可能性があることがわかりました。政府はキャスクを取り出して別の場所に処分し直すと発表しましたが、移管作業は早くても2033年になりそうです。

実際に中に入ってみて感じたのは、鉱山という場所はとても過酷な場所であること。ほこりっぽくて暗く、空気は淀んで妙に暖かい。キャスクが投棄されている穴はコンクリートでふさがれ、見られるのは坑道の一部だけですが、補強用の太い金網が曲がり、漏れてきた水をためる大きな水槽がありました。現場を崩れないように維持のため、500人が3交代で従事しています。

これまで10億ユーロ（約1500億円）かかり、今後も毎年1億1000万ユーロかかると試算されています。破損して塩分で腐敗したキャスクを本当に安全に取り出せるのかも不明ですし、その後の処分先も決まっていません。基本的に核廃棄物処理は電力会社の責任ですが、アッセは当時900万ユーロほどの委託金で政府が請け負ってしまったので、今後も税金でまかなければなりません。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂



ドイツで子育て

ドイツでは日本のようなじめはないと言いますが、やはり仲間はずれや喧嘩はあります。明が7歳になり、10人招待して誕生日会を開きました。男の子6人は同じクラスで、何かとM君がからかわれています。少々やりあうのはいいのですが、明らかに複数対一人という図。こういうふうに学校でもやっているのね、と想像がつきました。

ちなみに将来なりたいものを尋ねたら、女の子はサッカー選手、お手伝いさん、わからない(2人)でした。男の子は5人がサッカー選手、1人は水球の選手で、明は体育の先生でした。うーん、夢があるようないような。サッカー選手が多いのは、親が家庭でサッカーを見ているからか。明は体育の先生が大好きで、ひとりだけ現実的な答えとなりました。